

公民館報

おがわ

小川村ふるさと通信

No. 230
(2023 年春号)



春の温かな木漏れ日が待ち遠しくなりました

(写真 松本博充)

- おがわ熟年大学
- 二十歳を祝う会
- 歴史探索 - 明和の大抜け -
- 図書室だより
- 小川に生きる
- 路端の小さな命③



「おがわ熟年大学」 三年ぶりに開講

新型コロナウイルス感染症拡大から三年の休講を余儀なくされた村民の拠りどころの一つ「おがわ熟年大学」は十月六日に安心、安全を優先して開講を致しました。

今年も熟大開講は無理だよねえ・・・会う人々の言葉を受けるたびに何とか開催する手段はないものかと思案の毎日でした。

ようやく社会的に規制が緩和され、この状況をみて「おがわ熟年大学」は怯むことなく塾生四十三名とともに開講式が行われ染野村長、小林村議会議長、北田教育長をご来賓にお迎えしご祝辞を賜るとともに塾生の笑顔と期待の詰まった「おがわ熟年大学」がスタートされました。

式後、第一回「認知症を予防するために」の講義が

明治安田生命保険相互会社講師坂口基徳氏の弁舌爽やかなトークで始まりました。認知症の暗いイメージを払拭された解説説明で前向きな予防取組が出来る学習ができました。終了後に会社の配慮で「血液年齢検査」が実施され全員が年齢より若い判定に笑みと安堵の満足感を漂わせ塾大のスタートが切れました。

第二回は十月二十日「インターネット広告に騙される心理」と題し信州大学佐藤広英准教授によるネット広告の消費者トラブル実態をまじえ学習しました。

広告は「宣伝」が目的で正しい情報の提供が目的でないことを認識することが重要であり特に、人のコンプレックスや不安を狙ったものが主であり情報・心理コントロールや手口や特性を知るところを学びました。

座学講義が続き多少の疲労が見えてきた中、第三回は十一月八日の「脳の不思議を探る」について信州大学有路憲一准教授による講義が開催され健康維持に必要な多種食物がある長野県は、長寿県として長きにわたり首位を確保しているのは、体内細胞が活発にはたらく「高地」と「養生」と「良い食べ物」に恵まれて

第四回



いることが最大の要因であることを学びました。

第四回からは、文化芸術分野に移り和洋楽器の融合による「箏とピアノの調べ」と題して箏の清水範子さん、ピアノ坂原美菜さんの息の合ったハイレベルな演奏に魅了され会場は長く感動の空気に包まれました。

第五回は、社会福祉協

議会、保健センターとの協賛で開催の「文化講演会」は村内外から二百名余の皆さんが出席され諏訪中央病院名誉院長鎌田實氏の「地域で命を支える」と題して健康づくり・絆づくりの大切を学習しました。また、先生が取り組んでいる「らくらく筋活」をユーモラスな話術と実技を交え講演をいただきました。

特に人生百年時代をどう生きるかを話題にし、常に

社会とつながっていることが重要であることを教えていただき先生のひた向きなボランティア精神と人類に対する愛情の深さには敬意を表するとともに見習うべきものが数多くありました。

第六回は、人権の日にあわせ「私の歩んだ人生」と



題して飯田市旭ヶ丘中学教諭の大橋春美さんの「中国帰国者を生きて」の講演が開催され満州移民の歴史的経緯と自身の中国帰国者2世としての生活を赤裸々に講演され波乱万丈の人生を乗り越え現在中学の英語教師として活躍している姿に感銘しま

第五回

した。そして、交流トークタイムでは、黙って物を借りる、物を頂いてもお礼は言わない等中国と日本の習慣の違いには驚きました。お返しなどしたものでなら「縁が切れる」とし「シェイシェイ」は特別の言葉でもやみに使わないことも知りました。

令和五年を迎えコロナ感染者状況を気にしながら予定の講義・講演も順調にすすんで第七回は人々が忘れか



第七回

けていた笑顔を取り戻すため、落語「小川寄席」を計画。北信、中信を起点に活動している信濃家一門の信濃家中蔵、信濃家あい橋のご両人の「私の人世笑われっぱなし」の落語に満喫しました。

熟練した落語の語り

調に聞き入る塾生は最

後のオチに爆笑の渦。

第八回



二人をお迎えし「歌と語りの人世光路」と題し塾生の皆さんと思い出のある26曲を歌い上げました。

司会の「シャレ神戸」さんの話術に翻弄され掛け合い、声帯模写や自慢の歌声には更に会場は盛り上がり、ステージと客席が一体となった感動の時間でした。

講義も終盤となり第九回は、「防犯講演会」と題し

て小川村警察官駐在所篠原慶太郎所長の「甘い言葉

時間も忘れ二人の熱演にただ感銘するばかり。これからも落語をより

楽しく聞かためたための落語豆知識講義を実施し落語に対する新たな楽しみ方を学びました。

第八回は、歌によって健康維持をはかるため「昭和歌謡in小川村」を開催。長野市内で活動している「ウタカタ」の



に騙されないために！知って防ごう地域の安全！」と題して多発している電話でお金詐欺の対策について講義をいただき外出時の施錠や電話にでる際の注意など自己防衛の重要さと自身の防犯意識を高める学習をしました。

最終講義の第十回は、「人生健康に生きていくには」と題し、長年にわたり村民の健康管理指導をいただいている理学療法士加藤弘貴氏の講和と健康指導を受けました。

小川村の健康管理に携わって十三年。訪問診療や

定期講習会を開催するなど治療相談は好評であり、時には心の悩み相談も増加しているとか？塾生も自身に関係することが多いのか真剣な態度で受講されていました。

こうして全講義は、一部内容と日時を変更したものの、コロナ感染症も無く三月三日に全講義は終了を迎えました。

終了後、染野隆嗣村長さんをはじめご来賓のご列席をいただき「修了式」を開催し塾大生に修了書授与を行いました。修了書を受け取る塾生の皆さんには達成感と一抹のさみしさが感じられ次回の「おがわ熟年大学」に期待の笑みを浮かべ席を立たれて行きました。

コロナ禍で開講が心配された「おがわ熟年大学」は塾生四十三名で三年ぶりに開講し高齢社会における生涯学習としての重要な機能を担ってきました。今後も小川村学習塾として新たな感覚と内容充実をはかり会話・交流の場などを検討し参加者拡大に向けて更なる取組を進めてまいります。ご協力、ご支援誠にありがとうございました。



挑み続け、咲き誇れ。

〜二十歳を祝う会〜

令和五年一月三日、小川村公民館で令和五年小川村二十歳を祝う会が行われました。昨年の成人制度引き下げにより成人は十八歳になったため、村では『二十歳を祝う会』としたそうです。

仲間が来るたびに歓声が上がリ、久しぶりの再会に喜び、近況を伝えながらもスマホで撮影。中学卒業以来の再会もあったようです。

式は落ち着いた雰囲気の中粛々と進み、お祝いの言葉に改めて十代ではない、大人としての希望や誓い、責任と覚悟を感じているようでした。

式終了後は緊張も解け、再び笑顔でわちゃわちゃとした撮影大会でした。二十歳を迎えた皆さん、笑いあえる仲間や温かく迎えてくれる家族が、そして故郷・小川村があることを忘れず、夢に向かって挑み、きれいな夢の花を咲かせてください。

※今年も先輩である和田勇巳さんが撮影編集のダイジェストムービーをご覧ください。QRコードからお楽しみください。

さこ。





記念論文を一部抜粋で紹介します。

★松本 栞さん

大学では公共政策、特に地方地域における課題について議論しています。小川村と同規模の市町村と行政施策を比較しながら課題と解決策を発表すると、学友から村のことを褒めてもらいました。今までずっと生活してきて見えなかった魅力や可能性に気付かされました。居心地の良さを感じながら一村民として貢献していきたいと思いました。

★北田圭一郎さん

大学進学を機に一人暮らしを始めました。空間や時間の使い方など何事も自分で決めて生活していくことに楽しさを感じると同時に、今まで支えてくれていた家族の存在がどれほど貴重であったかを、折に触れて感じています。小川村には、受け継がれてきた伝統を守りつつ、固定観念に縛られない風通しの良い故郷であってほしいと思います。

★坂井日佳理さん

久しぶりに通学路を歩いたのですが慣れ親しんだ小川村が変化していることに少し寂しさを覚えたのです。一方で変化して行く良さに気付くこともできました。今までと違った観点で村の魅力を発見できることです。新しい出会いや初めて見る景色に触れることは新鮮で良い刺激を与えてくれるだけでなく、今ある環境を大切にしようという気持ちにさせてくれます。



二十歳 今 想う





「明和の大抜け」

今から250年以上前の江戸時代の明和年代（1764～1772年）成就から上野地区の大抜けによる地滑りをご存じでしょうか？

今回は村内に残る関連場所を調べてみました。

☆大抜け発生

○発生当初

明和5（1768）年3月から5月中旬まで（4月中旬から7月初旬）長雨が降り続いた21日（7月5日）の朝から地面が急に開き村人たちが大騒ぎとなり、未の刻（午後2時頃）に成就より上野にかけて急に地すべりが発生し、土尻川対岸の萩之久保山（美会地区）に押し付

林りん館からの眺望



け、土尻川と瀬戸川の2河川を堰き止めたとあります。

○被害状況

死者は上野、鶴牧田、萩之久保、成就の4地区で13人。うち10人は土尻川端の人達で、麦が大抜けの下になってはと麦刈りのところ土砂に飲み込まれ、家屋は、成就34軒、上野26軒が押し潰されたとあります。

地滑りで発生した湛水湖は土尻川の上流二里（約4km）の上坂まで及び、瀬戸川の本流は埋牧までと、支流の小川沢は土合より坂奈良尾を経て芋之沢までとあります。

○復興への普請

松代藩が見分し、6月1日より西山地域の村々より人足をよせ、実に三千人以上堀割の普請を行ったとありますが、6月12日に排水し始めたが大量の土砂を堀割に、クワ・モッコ・ツルハシ等では難工事のゆえ冬を迎え、翌年2月から再開。土尻川では3月16日朝五つ時（4月22日午前8時）、瀬戸川は5月25日（6月28日）の朝



堀割（天白地籍）
（県道長野大町線天白橋手前）

に欠壊。下流では大水害に見舞われたとあります。「小川村史」と「小川の古文書講座集の明和の大抜け（小川郷土史研究会編）」より）

☆地形地境が変わった！

○小根山町が見えない！！

小川村公民館の釜蓋地籍から、土尻川上流の小根山町が見えたと
言われています。（古老の言い伝え）

○成就・上野・馬曲の境界紛争！！

大抜けの影響で地形が変わり、境が確定するまで松代藩の裁定に持ち込まれ、約60年間を経て、解決したとあります。「小川村史」より）

☆現在も受け継がれているもの

○天白社（診療所西側山中）



天白社



鹿島社



水引祭

上野・大久保・美会の氏子十数名で、堀割付近の杉下に災害防止のための社を祀り、毎年9月15日に奉納を行っています。「小川村の石造文化財」より）

○鹿島社（細越地区）

細越集落の北外れの山頂に抜け止めの防災神として社を祀られています。

○水引祭（小根山町区）

2月16日に水が引き始めた日を記念して小根山町区全員により、細越の鹿島様に向かい一礼を行う儀式。近年は2月16日に近い日曜日に併せて区の総会を行います。

○小川村の石造文化財」より）

○お流れ桜（上野マレットゴルフ場の北側）

成就地区の酒盛場地籍にあった山桜が流され、250年以上経つ現在までも根付いています。

（天然記念物、村文化財に昭和

36年9月1日指定）



お流れ桜



図書室だより
小さな木の空
 第111号
 図書委員会

「星空観察会＆ランタンづくり」開催

1月28日に図書委員会主催の『星空観察会＆ランタンづくり』を行いました。

「せっかく星のきれいな小川村にいるのだから、こどもたちと一緒に星の世界について学びたい」。そんな思いで企画した本イベントでしたが、当日は残念ながらの曇り空。屋外での観察会は見送り、公民館で天文台の古谷さんのお話を聞きました。プロジェクトに映し出された星の世界に見入る子どもたち。「このもやっとしたもの、なんだかわかる？みんな知ってるかも」「あ、ウルトラマンの写真！わかったM78星雲！」「ウルトラマンが住んでいる（とされている）星はほんとうにあるんだよ」というやりとりがあったり、季節の星空をわかりやすく説明してくれたり。天文台付近の実際の星空の映像はきらめくたくさんの星の様子にこどもも大人も釘付けでした。そして、子どもたちの一生懸命作業する姿、講師の話や紙芝居に、じっと耳を傾ける姿が印象的でした。

ご参加いただいた皆様ありがとうございました。



紙芝居「雪わたり」を読み聞かせ



「小川村は県内でも有数の星がきれいな場所。登山などしなくても気軽に星が楽しめる貴重な村」と古谷さん



思い思いの作品が完成。お部屋を暗くして灯しました



ランタンづくりの様子。限られた時間でしたが一生懸命作りました

ブックスタート

『子どもに読んで聞かせたい本は?』

～生後6ヶ月の赤ちゃんへ
本のプレゼント～

令和4年4月から
令和4年5月生まれの赤ちゃん

「生後6ヶ月」

谷川俊太郎



千葉 ちば

瑞生 みずき
くん

「赤ちゃんのまめまめ」

Lab Zoo



松本 まつもと
紗来良 さらら
ちゃん

「コーネリアス」

レオレオニ



長澤 ながさわ

くるみ
来美 ちやん

「めいめいもももも」

長谷川 なががわ
穂季 せき



竹内 たけうち
智也 ちや
くん

「おっとあぶない」

リフマンロー



下園 したの

こはく
琥珀 ちやん

図書室の方へ ～楽しみ編～

「読みたい本を
リクエストできる」
って知ってた?!

今回は、知る人ぞ知る、図書室の素敵なシステムの紹介です。図書室では、利用者の皆さんからリクエスト本を随時受付けています。申込書を記入し、受付けカウンターのボックスに入れるだけ。採用されるのかどうか気になるのですが、たくさんの方に入っているようにしているそうです。ぜひ足を運んでみてくださいね。

ボックスの横に申込書
があります



▶ 申込書がこちら





峰村 正一さん
(日本記)

雄大な北アルプスを望む日本記に生まれ育った峰村正一さん。実は、海上自衛隊員として世界の海を航海した経験の持ち主。海のない小川で生まれ育った峰村さんがなぜ海上自衛隊員になり、どのような経験をしてきたのでしょうか。

峰村さんは、高校を卒業後長野市内の三菱電機に就職しカラーテレビの製造に携わっていました。就職し2年が経過した頃「このまま仕事を続けて将来、人生を振り返った時に充実した人生だった」と思えるかと疑問を抱き、また第二次世界大戦で戦死した叔父のことや国を思う気持ちに心動かされ自衛隊入隊を考えました。自衛隊には陸・海・空がありますが、海への憧れや「男なら海!」という思いで海上自衛隊に入ると決め、昭和47年20歳の時に反対する親を説得し入隊。入隊後は、横須賀教育隊で約半年の訓練。その後実施部隊に派遣されました。海上自衛隊には「潜水艦要員」「水上艦艇要員」「航空部隊」があり、峰村さんは「水上艦艇要員」を希望し配属されました。最初に乗船した船は第二駆潜艇「きじ」という船。この船は小さく揺れも激しく乗船した2年ほどは船酔いに悩まされたそうです。

峰村さんが海上自衛隊員として訪れた国は約25か国。練習艦「かとり」に乗船し5カ月半かけて世界一周の遠洋航海も経験しました。この航海での思い出は、トルコに立ち寄ったこととギリシャのエーゲ海。トルコでは、イスラム教の寺院であるモスクを見ることができ、エーゲ海はそれまでに見たことがないような美しいコバルトブルーの海で今でも忘れられないそうです。また、長い航海、米や肉類のほとんどは日本出発の際に積み込み冷凍、その他の野菜などは寄港地で調達し、15、6名の調理員が食事を作ってくれたとのこと。また、海上では曜日感覚がなくなるため曜日が分かるように「金曜日はカレーの日」だったそうです。

その後、峰村さんは南極観測船「しらせ」に乗船。1998年から2000年の第40次41次42次南極地域観測隊として任務にあたりました。

もともと「しらせ」は文部科学省所有の船で防衛省が運行、整備を委託されています。毎年11月13日に昭和基地で使用する一年分の燃料と物資を乗せ南極に向けて日本を出発。約40日間の航海を経てクリスマス頃に南極に到着します。180名の乗員のうち40名は一年間南極に滞在し観測・調査を行う専門家で構成する「越冬隊員」。残



りは海上自衛隊員と2か月ほど滞在し越冬隊員を支援する「夏隊」と呼ばれる人たちです。船内には美容室や浴室も完備されており、医師も同行するため安心して長い航海ができるそうです。

「しらせ」の船体は海でも目立つようにオレンジ色で、船首は特殊鋼板で出来ており、厚さ1.5m〜2mある水でも割って進むとのこと。船を停泊させる昭和基地沖合2km地点に近づくと氷は更に厚くなるので接岸までに3500〜4000回前進後退を繰り返し接岸するそうです。

12月の南極は「夏」「夏」と言っても最高気温はマイナス1.2度。そして太陽が沈まない白夜で白銀の世界が広がっています。そんな南極で海上自衛隊員は昭和基地の風力、太陽光発電の整備や発電機のオーバーホール（解体して検査）などのオペレーション支援そして物の輸送、氷の状態調査などの任務を行うそうです。

峰村さんに南極の思い出をお聞きすると「見渡す限り白銀の世界だった。一番の楽しみはやっぱり食事だったかな。申し訳ないくらい贅沢で美味しいものばかりだった。でもやっぱり金曜日はカレーだったよ。」と。また、白銀の上をスノーモービルで駆け抜けたこと、



日本に戻るころに出現するオーロラも思い出の一つのこと。約2カ月の南極での任務を終えると前年から滞在していた越冬隊を乗せ日本へと戻ります。3年間の「南極地域観測隊」の任務後、補給艦任務を希望し「とさわ」に乗船。その後、アメリカで9・11同時多発テロが発生しその影響で給油活動を行うためインド洋に派遣され3年間活動を行うことに。「本当は、補給艦任務になれば少しは気持ちも楽になるかと思って希望したけど、結局同じだったよ」と峰村さん。

35年間の海上自衛隊時代のほとんどを船の上で過ごし、「家族と過ごす時間がなくて、小学校だった娘が次に会った時には高校生になっていて驚いたことも。でも自分の選択は間違いないかなかったと思う。日本を離れて、多くの国を訪ねて日本や故郷のすばらしさ改めて実感した。それはとても大切なことでのいい経験になった。」と峰村さんは振り返ります。

小川に戻って17年目。今は畑作業や家族との時間を大切に第二の人生を過ごしています。「ずっとこれまで緊張感を持って生活してきた。70歳を過ぎてようやくゆつくりとした時間が流れている。でも人生にはある程度の緊張感も必要。これからはどの緊張感を持って過ごしたい。」と笑顔で話してくださいました。



シリーズ 路端の小さな命 ③

路端の隅でたたずんでいる動植物や石造物について紹介します。このコーナーに情報を提供されたい方は公民館までご連絡ください。

ツバメの巣を拝借

☆越冬ツバメ？

朝刊配達をしている方から、この冬ツバメの巣に寝泊りしている鳥がいると情報提供がありました。ツバ



メといえば、冬の間はエサを求めて東南アジアで過ごし、暖かくなる春に日本に戻ってくる「渡り鳥」です。

一般的に寒さに弱いとされるツバメ。寒さが厳しい小川村で冬を越すのは温かい地方に行きそびれた越冬ツバメでしょうか？真相を確かめにお宅を訪ねてみました。

☆ツバメと人間

あいにく、エサを食べに出かけていて留守でした。とてもよくできていますツバメの巣は、田んぼの藁と泥で作られており、人

間が暮らす環境と密接な関係にあるようです。

ツバメは昔から「民家に巣を作る」という習性から、商売繁盛・農作物が豊作になる、など幸運を運んでくれる縁起の良い鳥。農薬が使われていない時代は、害虫を食べてくれる益鳥として大切にされていました。

しかし、田んぼの減少とともにツバメのエサとなる虫も減り、ツバメも減少傾向にあるようです。

☆越冬する鳥の正体は？

さて、エサを食べに出かけている鳥の正体ですがよく調べてみると…ツバメの留守中に巣を拝借しているスズメでした。昔からある民話の中では、ツバメとスズメは姉妹だったそう、とても仲が良かったとか。ツバメの巣を拝借する理由もうなずけますね。

田んぼが広がり、農業中心に生活していた時代は幸せを運ぶツバメの巣が沢山ありました。春を知らせてくれるツバメが毎年、里に戻ってきてくれるよう、農のある暮らしを守りたいと改めて感じます。



館報おがわ (230号)
小川村公民館 / 〒381-3302

発行者：松本貴秀 編集者：松本博光
長野県上水内郡小川村大字高府 8695

TEL・FAX：026-269-2077 E-mail：komin@vill.ogawana.gn.jp

令和5年3月9日発行